

發達表現するものである。これを満足せしめ調節を與へ助長せしむるには家庭のみにて出來得ざるは明らかなる事實である。幼稚園は其の出來難き家庭の缺陷を補ふこと、即ち幼兒の生活に満足を與へ圓滿なる發達を助成するのである。

可論者の説は幼稚園の性質と必要を述べたのもあるが、其の多くは保育の附帶事項とも申すべきか、家庭と協力したる保育事業の一の現はれを述べてあるのに過ぎない。可論者も幼兒を本位として其根本に立ち入つて否論者を首肯せしむる底の説を多く述べられなかつた事は頗る遺憾とする處である。

## 幼稚園可否の議論

倉 橋 生

○問題はあなたの幼稚園の良否にある。あなたの幼稚園が良ければ、それでよろしい。あなたの幼稚園が悪かつたら、幼稚園そのものを可とする論が百出ても、千出ても、何としようもない。否寧ろ一層進んで言へば、問題はあなた自身である。幼稚園教育は、「幼稚園といふもの」が幼兒を教育して居るのではない。幼稚園に於てあなたが幼兒を教育して居るのである。概念的に議論的に、「幼稚園といふもの」がどうあらうとも、園長たり保母たるあなた如何といふことが、最も具體的な實際問題である。

○幼稚園可否の議論が世間にいろ／＼出るのは、至極く有益なことである。幼稚園に従事するものは之等の説に就て充分に聴き細心に注意し研究すべきである。併し、その聴き方研究し方は局外の

人とは全然違つた態度をとらなければならない。すなはち、局外の人には可否の結論を主とするのであるが、幼稚園従事者にとつては、可否の結論は既に済んで居ることである。一方には國家が其教育法令に於て認めて居る教育として、また一方にはあなたが自信を以て従事して居ることとして、今更結論に迷ふ様な氣の弱いことがあらう筈はない。併し、結論が可でも、實現が果してその通りかといふことは別個の問題である。そして此の點に於ては始終自らを危ぶむ位の敏感と苦勞性を持つて居なければならぬ。故に可否いづれの論を聽くにつけても、直にあなたをして居ることに引くらべて細かに考ふべきである。斯くすることによつて、可否いづれの論からも、大に學ぶことが出来る。殊に否論者の言の中にどの位多くの、口にながき良薬があるかも知れない。

○更に問題を轉じて、家庭の方からいへば、幼稚園といふものを引きくるめての可否論で、直に早

合點をされてはならない。又幼兒の教育の全體を幼稚園の責任に歸する様な論で、問題を切り上げられてはならない。幼稚園——少くも現在の幼稚園は——小學校の様に劃一のものではなくて、保姆の考へによつて、いろいろ違つた流義の教育法が用ゐられて居る。あなたの大切なお子さんを入園させる前に、それ等の點をよく研究しなければならぬ。又幼稚園は——特殊幼稚園は別として——決して家庭の代りをする處ではない。家庭と協同して、其の子の教育を完きが上に完からしめんとするものである。幼稚園が家庭教育の責任まで負ふものゝ様に考へられたら、それは大きな誤りである。而して其の誤りは幼稚園の誤りでなくて、家庭の誤りである。家庭の方に向つて是非訂正しなければならぬ誤りである。此の誤見に基いて立てられた、幼稚園可否の論は、實に問題の歸着點を轉倒して居るものである。すなはち家庭は其の自らの教育上の責任を充分盡した上で、始めて幼稚園可否の論に入り得るのであることを忘れてはならない。